St. Luke's International University Repository

国際精神保健看護学会参加報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 佳詠 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/424

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

国際学会・セミナー参加報告

1．第7回国際精神科看護研究学会（7th International Network for Psychiatric Nursing Research Conference）参加報告

2001年9月26日～9月28日の3日間，ミセスセントジョン記念教育基金の助成を受け，水野恵理子とともに英国のオックスフォードで開催された第7回 国際精神科看護研究学会（NPNR）に参加した。

NPNRは，Royal College of Nursing（英国看護協会）が主催するオックスフォードで年1回開かれる学会である。今回の参加者は7～8割が英国人であったが，南アフリカ，イラン，イタリア，オーストラリア，カナダ，アメリカ，スウェーデンの他国からの参加もみられた。アジア系の参加者は我々だけであった。また，学会参加者の3～4割が男性ナースだった。

今回の学会では，“from practice to evidence”をメインテーマとし，さらに発表会場ごとに「サポート・救急現場の実践に対する根拠の調査」，「小児と青年期のメンタルヘルス－根拠を用いて－」，「高齢者のケアにおける実践の開発」，などのサブテーマがつけられていた。発表内容は，触法精神疾患患者のケア，暴力・興奮を呈する患者のケア，強制入院患者の人権擁護，認知行動療法による介入研究，児童虐待への看護介入，家族や介護者へのケア，リエゾン精神ナースの実践研究，精神看護者のための教育プログラムの実践評価など多岐にわたり，質的分析による研究が大半を占めていた。発表者は臨床家が多いのも特徴的であった。

様々な立場にある看護職が真剣にディスカッションをし，evidence based researchをさらに発展させていこうという前向きな姿勢と気持ちが伝わってきた。また，日本の看護に対する諸外国の関心は非常に高いことから，わが国の看護研究，看護実践を積極的に海外に発信していくことの必要性を改めて感じる機会であった。

（精神看護学：下枝恵子）

2．国際精神保健看護学会（International Society of Psychiatric-Mental Health Nurses）参加報告

精神看護学部門では，今年度，羽山由美子，下枝恵子，筆者の3名がアメリカの精神看護学の学会に出席した。2001年4月25～28日の4日間にわたり，アリゾナ州フェニックスで開催された国際精神保健看護学会第3回年次大会（International Society of Psychiatric-Mental Health Nurses, Third Annual Conference）である。メインテーマは，「Visions, Values and Victories」であった。場所はクラウンプラザ・ホテルで，参加者は200名前後であったろうか。海外からは，カナダ，イギリス，オランダ，南アフリカ，ケニヤ，パキスタン，台湾，日本からは筆者らの3名であった。

プレ・カンファレンスとして，1日通しの3種類のプログラム（アルコール依存症治療，思考－気分－行動障害，分裂病のアウトカム）が用意され，また基調講演では障害児親の会の代表（CEO）であるロス博士がADHD（注意欠陥多動症）の治療に関する論争と政策・法制化問題などについて話した。特別講演では，南イリノイ大学のメアリ・アン・ボイド博士が「女性とメンタルヘルス」というテーマで，一人の女性患者との出会いから彼女の死に至るまでの過程を，時代背景・社会情勢と関連させながら語った。さらに，精神科看護婦の終末期ケアにおける役割，抑制と隔離を減少させるプログラムの成功について，2本の特別講演があった。

研究発表は，リサーチ・教育・実践という3領域でそれぞれにプログラムが組まれ，多彩なトピックス

が盛り込まれていた。発表された演題の中で注目を引いたのは，日本ではまだほとんど研究されていない，ストーキングに関する研究であった。まだアメリカでもあまり研究が進んでおらず，ストーキングの定義も様々だが，精神看護婦がストーキングの対象になりやすいという報告がなされていた。

この学会では，日本の学会とは異なる研究テーマやカンファレンスの内容，また参加者の活発な意見交換を目の当たりにするなど，多くの知的刺激を受けた。今後，欧米とは異なるシステムをもつ日本の精神看護の現状についても，積極的に意見交換していく必要性があると感じた。

（精神看護学：岡田佳詠）

3．在宅ホスピス日米合同シンポジウム参加とホスピス訪問（ハワイ島）

2001年度ミセスセントジョン記念基金の援助を受け，地域看護の教員3名（川越・長江・酒井）は9月4日から9日までハワイア島を訪ねた。ハワイ島訪問目的は，①在宅ホスピス協会が主催する日米合同シンポジウムへの参加と②ハワイ島にある3個所のホスピス（Hospis of Hilo・Hospice of Kona・North hawaii Hospice）との交流であった。日米合同シンポジウムでは，川越が「日本における在宅ホスピスケアの歴史と今後の課題」について報告し，ハワイからは，Kenneth Zersi 氏（Director of Hospice Hawaii, board member of Hospis and Palliative Nurses Assosiation）が「米国における在宅ホスピスケア」の報告を行った。在宅ホスピスケアは専門的な看護であり，ホスピスケア能力をもった認定看護婦が必要であること。その能力は，在宅ホスピスケア基準にもとづいた実践能力として明示されるものであることなどが確認された。歴史の長い米国の在宅ホスピスケア実践と研究の蓄積は，われわれの研究テーマである「在宅ホスピスケアの標準化」に大きな示唆を与えるものであった。またホスピス訪問では，3個所のいずれのホスピスでも，ボランティアを含めたスタッフで暖かく迎えていただき hospitality を身をもって感じることができた。ホスピスケアが在宅サービスとして提供されていること，interdisciplinary team で実践されていること，地域住民を巻き込んだ活動であり地域のホスピスとして存在していること，またホスピスの責任者が大学院を終了した看護婦であり，リーダーとしてホスピスの管理・運営を担い，地域のネットワークづくりや政策的課題にも取り組んでいることなど，在宅ホスピスケアのみならず地域看護の在り方についても大きな示唆を得ることができた。

（地域看護：川越博美）

4．北欧の社会福祉・教育視察研修に参加して

2001年8月21日～8月28日の日程でデンマークの教育と福祉に関する研修に参加した。デンマークで「胎内から天国まで」といわれている福祉，すなわち国民全体が健康で文化的な生活が保障されるとはどんなことなのか興味があった。答えは「もし障害者になった時，あるいは老人になった時，どのように処遇してもらいたいか」ということに置き換えられ，「……してもらいたいことが，福祉で実現すること」であった。

今回の研修プログラムでは，幼稚園，養護学校，障害者施設，高齢者（デイケア）センター，特別養護老人ホーム（プライエム）を見学し，施設長や専門職の方々の話を聞いて質疑応答の後に，短時間ではあったが利用者の方々と交流ができた。共通していたことは，子供もお年寄りもみんなが，ほどよく五感が刺激され，あるがままの自然体で生活できていたことであった。歴史の流れの中で獲得されてきた自己決定を伴う「自由」，協同組合に端を発するお互いに助け合う「博愛」，早くから制度化された教育において人と比較して差別しない「平等」，これら3つの精神が現在の人々の文化となって受け継がれているからこ